

元気な老人

とんだ玉三郎

会社から帰ってきた藤岡道雄は家の前に止まっている車を見て、一瞬、嫌な顔をした。「車で来ているのか。百合子も百合子だ。説得して早く運転を止めさせないとそのうち事故を起こすぞ」とひとり呟いた。玄関をあけるとなかからは相馬満太郎の豪快な笑い声が聞こえてきた。道雄が帰宅したのを知って玄関から居間に入ってくる道雄に満太郎は言った。

「道雄君、お邪魔してる、夕飯をご馳走になっているところだ。散歩がてら寄らせてもらった」

道雄は怪訝そうにいった。

「散歩がてら、とおっしゃいましたが、外にお義父さんの車がありましたけど」

「はは、車で散歩だよ」

百合子が心配そうに口を出す。

「もう運転、いい加減にやめたら。九十にもなって危ないよ。お父さんの家からここまで歩いても十五分くらいでしょ。足は達者なんだし」

「何を言っとる。まだ八十九だ。九十にはなつとらん。天気予報のニュースで雨が降り出すと言っていたので車できた」

「雨が降れば、傘ぐらいうちのものを貸してあげるよ。よく年寄りのドライバーの事故がニュースになっているじゃないの」

「運転を始めて七十年だ、お前の生まれるずっと前から運転している。今まで事故はなにひとつ起してない。若い者よりずっと運転はうまいよ」

「それでも心配だわ。事故を起こしたら取返しがつかないし」

「車で毎日ジムに通っている。車がなかったら行けなくなるじゃないか」

「ジムぐらい、歩くか自転車で行ったら」

「お前たちがなんと行っても運転はするぞ。ところで道雄君、ちょっと腹が出てきたんじゃないか。運動しているか」

「いや、忙しくて、たまにゴルフに行くくらいです」

「ジムくらい通えよ。俺は体を鍛えてこのように元気だ。早く老け込むぞ」

百合子は父親がまだまだ元気だいて欲しいとは思うものの自信過剰なものにはいささか閉口していた。普通、連れ合いを亡くすと男は急に元気を失くすもの

だが、満太郎は例外なのか老いてますます意気盛んであった。

満太郎の家は下町の商店街にある代々続く和菓子屋だった。男の子がいなかったので長女に婿養子をとって、しばらく、婿とふたりで店をやっていた。婿の孝則も仕事の要領を覚え、一人前になった頃だった。七十歳の時に食道がんを患い入院して手術した。それを機会に隠居の身となった。幸いに回復は順調で再発のおそれもなく、反って病気になる前よりも元気になった。店の二階の住居を長女夫婦に明け渡して、店にもそれ以来、ほとんど顔を出したことがなかった。

郊外に住みたいという妻の希望で、次女の住む郊外の町に家を買って移ってきたのだった。移ってからは自分ひとりか、あるいは夫婦で旅行によく出掛けた。海外旅行も何度かした。その妻が新型コロナに感染して、持病が悪化し二ヶ月ほど前に亡くなった。それからは満太郎は独りになり寂しくなったのか、近くにある次女の家によくちよく行くようになったのだった。

満太郎が帰ったあと、道雄は百合子に言った。

「お義母さんが亡くなってうちによく来るようになったね。お義母さんが生きていた頃に比べて頑固で自信過剰になったような気がする」

「私もそう感じるわ。連れ合いを亡くして、自分が頑張らないと思って気が張っているだけだと思うけど」

「言いくいんだけれど、ひとり暮らしはもう無理だろう。そろそろ姉さんに引き取ってもらったら。こう毎日のように来られたらたまらないよ。竜太も来年は大学受験を控えて大事な時なんだから」

「私もそう思って姉に相談したの。でも、いい返事をなかなかしないのよ。」

『店は二人でやっているのでお父さんの面倒まで見切れない』って言うのよ」

「店を継いだのは姉さん夫婦だろう。お義父さんの面倒を見るべきじゃないかな。俺も人の家のことまで首を突っ込むつもりはないが」

「もうそろそろ九十でしょ。私たちも一人の生活は無理と思っているわ。姉とは老人ホームに入ってもらったらどうだろうか、と話しているの」

「まだ自分は若いつもりのようなだから果たしてすんなり入ると言うかなあ」

「姉といっしょに説得してみるわ。老人ホームに入れば、車はいらなくなるから運転もしないようになって安心だし」

数日して、百合子は姉の桃子と満太郎の家を訪ねてきた。

「珍しいことがあるな。二人揃ってくるなんて」

「お母さんにお線香をあげにきたの。それにお父さんに相談があるの」

二人が母の遺影に線香をあげてお参りした後、桃子がおもむろに口を開いた。「お父さん、一人の生活は大変でしょ。と言っても私の家や百合子の家に来てもらっても若い人たちと一緒にだと生活のリズムが合わなくて、かえって大変だと思うの」

すると、満太郎は待つてましたとばかり言った。

「芙美子の四十九日も過ぎたので、そろそろ桃子の家に行こうかと思っている。この家へは芙美子の希望で移ってきたのだ。その芙美子もいなくなったので生まれたところに戻りたい。あれはもともと俺の家だった」

桃子はびっくりしたようにしていった。

「突然、何を言い出すの。私たちに何の相談もなしに。私も店に出ることが多いし、申し訳ないけどもお父さんの面倒をみる余裕なんかないわ」

「なに俺はこの通りまだまだ元気だ。面倒なんか見てもらわなくてもいいよ。お前の家にいけば、孝則君に仕事のことをじっくり仕込んでやれるしな」

「店は私たちが切り盛りしているし、和菓子も若い人の好みにあった新商品が増えていて、昔と随分違うわ。昔のやり方では売れないわ。父さんは今まで頑張って私たちを育ててくれたんだから、これからは悠々自適でいてくれればいいわよ」

すると、百合子が桃子を援護するように言った。

「そうよ。お父さんの頃とは違うと思うわ。私たち、お父さんに設備の整った老人ホームに入ってもらったら、どうかしらと相談してきたの」

満太郎の顔色が変わった。少し間をおいて日頃でも大きな声がより大きくなり外に聞こえるくらいの声で怒鳴った。

「バカもん。俺を棺桶に片足を突っ込んだ耄碌爺婆どもと一緒にくたにする気か。そんな所にいくほど耄碌してない。頭も体もこの通りしっかりしている。年寄り扱いするな」

と立ち上がるとラジオ体操のような運動を始めた。

桃子も百合子もその剣幕に圧倒された。満太郎を老人ホームに入ってもらおうという試みは見事に失敗した。家に帰って桃子は顛末を孝則に話して善後策を相談した。

「お義父さんには随分と世話になったし、無碍にするわけにもいかないと思う。本人の希望を入れてここに来てもらうしかないだろう。恵理子のいた部屋を整理すれば使える」

一年ほど前に長女の恵理子が結婚して家を出たので、その部屋は物置きになっていた。

桃子は夫がそう言うのであれば、受け入れるしかないと決心した。

満太郎はそれから一ヶ月ほどしてやってきた。ただ、桃子の家に来ることの交換条件として、車の免許を返上させることが出来たのは予想外のことだった。引越してきた満太郎は店を覗くなり言った

「どうして洋菓子のようなものを一番目立つところに並べてあるんだ。和菓子屋と言えば、饅頭、羊羹、団子だろう。いつから洋菓子屋になったんだ」

桃子は孝則が何か言おうとするのを遮って言った。

「最近の若い人たちは饅頭なんか食べません。ハイカラで斬新な洋菓子風のものがよく売れるのよ。孝則が娘たちとアイディアを出し合って新しい商品を開発したのだから、お父さんは黙ってて」

父親譲りの負けん気の強い娘の剣幕にさすがの満太郎も黙ってしまった。

4

桃子がスーパーで買い物をしているとレジで男と店員が揉めている。帽子を被ってマスクをしていたのですぐには分からなかったがよく見ると満太郎である。店員に大声で毒づいている。

「お釣りをどうして小銭でよこすんだよ。財布が膨らむじゃないか」

「すいません。五十円玉がなかったものですから」

「年寄りだと思ってバカにしているのか。店長を呼んで来い」

桃子は大変なことになると思って、恥ずかしかったが満太郎の傍に駆け寄って言った。

「お父さん、店員さんの言ったように五十円玉がなかったのよ。しょうがないでしょ。早く行きましょう。どうもお騒がせして済みませんでした」

桃子は情けない思いで店員に頭を下げ、満太郎を連れて逃げるように店を出た。

夫婦は日が経つにつれて同居に同意したことを後悔するようになった。満太郎は頑固で独善的、昔の自慢話を繰り返すなど、周りの者を閉口させた。

どうすべきか、思案していると、徳岡の顔が孝則の頭に浮かんだ。徳岡の家は孝則の実家の近所で、お互いに家を行き来していたので知己であった。彼が老人医療専門のクリニックを経営していると聞いていたので連絡をとり、満太郎の様子を説明して相談に乗ってもらうことにした。

「厄介な老人と同居するようになったようで大変だなあ。ところで和菓子のお店、調子はどうだ」

「若い子の好みそうなアイディア商品はなかなか好調だし、最近はネット販売が主流だ。うちの菓子もテレビに出してもらってからよく売れるようになった。和菓子の世界もだんだん変わってきたよ。老人医療のほうも大繁盛じゃないか。年寄りはどうぞん増えるし」

「お陰様で。と言うと不謹慎だが忙しいね。俺の場合はケアの必要な老人だけでなくその前段階の患者、いや、自分は患者と思っていないが、はた迷惑な元気の老人に手を焼いている人たちの相談にもものっている」

「そうそう、お前のツイッターで、『老害……』というのを見たよ、そこに『困った老人、相談にのります』てなことも書いてあったな。『老害』って政治家だけのものではないのか」

「確かに今までは『老害』というの『企業や政治の中心にある人たちの高齢化を非難し、若返りの必要性をこめていう』という意味合いだったが、最近はずっと広い意味で使われるようになったんだ」

「テレビで引退した政治家が、『女性のいる会議は長い』とかなんとかを言った人がいたろう。それだけじゃないのか」

「それだけではないんだよ。老害の典型的なパターンは『頑固で傍若無人、昔自慢、独善的、何回も同じことを話す、すぐに怒り出す、被害者意識が強い』ってところかな」

「俺の義父はその典型だよ。治療法はあるのかな」

「結論からいうと残念だが薬も治療法もない」

「じゃ、どうすればいいのか」

「敢えて、言えば同病相憐れむ、ではないが、同じように老害をまき散らす老人を一か所に集めて老人同士で暮らしてもらう。それが出来なければ、若い者が我慢するしかないだろう。それが嫌なら近づかずだ」

「一緒に暮らしているから、近づかず、は無理だな。いくらわからずやの老人だから我慢しろと言っても不愉快だよ」

「同じ話を繰り返しても本人は悪いと思っていないし相手を不快にさせることに気付いてないんだ。でも『その話は何遍も聞いたよ。もう聞きたくない』とは口にできないだろう」

「なぜなんだ」

「その時には気分がスーとするだろうが、若い者は後で後悔するね。『ああ、先のない老人をいじめてしまった』とね」

「それもいやだね」

「適当に相槌を打ってやることだ。すぐにものを教えようとするだろうが、断るのではなく『よろしくお願いします』と言っておけばいいのだ。知ったかぶりをしても感心したように聞いておけばよい」

「だいぶんコツがわかってきたよ」

「寝たきりになられるより、いいだろう」

「妻にも今の話をするよ。うちの義父のような老人は多いのかな」

「意外に多いんだ。老人というと『介護やケア』が頭に浮かぶけれど、こっちのほうが大変だ。自分は元気で何でも出来ると思っているから老人ホームなどには入りたがらない。しかし、周りに迷惑をかけて不愉快な思いをさせるからね」

「確かにそうだな」

「しかし、お前の義父はまだいい方だ。大きな会社で役員にまでなった人の中にも昔の部下や現役の社員を相手にやたら自慢話や説教をしたりする人も見掛けるよ」

「そんな立派な人でもそうなんだ」

「その立派がいけないんだ。昔の栄光が忘れられないんだなあ、きっと」

「うちでは犠牲者は俺たち家族だけで済むが、昔の部下や現役の社員を相手にするとは念がいつてるね」

「そうなんだ。建設機械を作っている大手企業の工場長さんから相談を受けたことがある。彼が言うのは『取締役までなった先輩が工場に来て、しきりに自慢話をして、さらに時代遅れの提言を我々にして迷惑している』だそうだ」

「いろいろ、迷惑を蒙っている人も多いんだね」

満太郎への対応も孝則は分かってきた。

「孝則君、俺がそばに来て心強いだろう。なんでも教えてやるよ」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

満太郎は得意そうにうなづくのだった。

孝則を相手に晩酌をやるときには自慢話を繰り返すのだった。同じ話を繰り返すので内容を孝則はすっかり覚えてしまった。

「孝則君、商売は真心だ。俺の若い頃はオート三輪にまたがって少しでもいい材料を安く仕入れよう、と東京中走り回って小豆や砂糖などを探したものだ。この商店街でも朝日堂の菓子は美味いと有名だったよ。遠くから買いに来る客も多かった。売り切れになってがっかりして帰っていく客には『今度はお客さんの分、取っておきます』と言ったものだよ」

孝則も調子を合わせる。

「饅頭の評判が良かったのですよね」

「それだけでない、羊羹もだ。店の前はいつも長蛇の列だ」

「済みません。そうでしたね。私も負けないように頑張ります」

「あれは、商店街の組合長に選ばれた時だった」

「ああ、アーケードのことですね」

「そうだ、雨の日には客足が伸びないし、店頭に出してあるお茶が湿気ると安井商店の主人が言ったのだよ」

「それで、お義父さんが『アーケードを作ろう』と提案したんですよね」

「そうだ。そうすると、金がない、アーケードは贅沢だ。と皆が言い出した」

「それで、お義父さんが銀行とうまく交渉して低い利子で金を借りたんですよね」

「そうそう、銀行は俺を信用して貸してくれた。他の者が行っても貸さなかったらう」

と言って、満太郎は銚子を差し出して言った。

「孝則君、まあ一杯いけよ」

「頂きます。それで当時はまだアーケードを備えた商店街は珍しくて、大勢の客が押し寄せたんですよね」

「そうだ。テレビ局も来た」

毎度のことだが、ここで満太郎は当時のテレビ局のことを書いた新聞の切り抜きを自分の部屋に取りにいくのだった。

台所で、食事後に後かたづけをしていた桃子は毎回、一字一句も変わらない二人の壊れたテープレコーダーのようなやり取りを感心して聞いていた。満太郎がトイレにたった時に、桃子は孝則に言った。

「毎回、毎回、よく同じ話が出るわね」

「この前、徳岡さんから聞いた話をしただろう。とにかく相槌を打ってやれば年寄りには喜ぶらしい」

「そういうものなの。私には出来そうにないし、お母さんがそんな自慢話などしなかったわ。男だけなのかしら」

「いや、徳岡さんの話では、女も孫の自慢話をする人が多いらしいよ。それも孫のいない人に遠慮なしにするらしい」

「そうなの。孫の自慢話を自分の子供にするわけではないから、私が知らなかっただけなのかな」

満太郎がトイレから出てきた後に入った息子の徹が桃子のところに来て言った。

「また、おじいさん、トイレ流してない」

「しようがないわね。言っても言っても治らないんだから」

「おじいさんに流した後、ちゃんと確認するように言ってるよ」

と、徹は仏頂面をして自分の部屋に戻っていった。

桃子は居間にいる満太郎に言った。

「お父さん、トイレ、流さなかったでしょう」

満太郎は平然と答える。

「流れてないって、トイレ故障してるじゃないか。工事屋、呼んでん見てもらえ」

あいた口が塞がらなかった。ただ、逆らえば喧嘩になる。ぐっと我慢するしかなかった。

「はい、はい」

ここは大手建設機械メーカー、倉沢建機の下山工場の工場長室である。春田工場長に白井総務部長が創立記念日の式典のことで相談に来た。

「工場長、今度の工場の創立記念日の招待客の件で相談があるのですが」

「もう、そんな時期なのか、時が経つのは早いね」

「去年、太田黒さんの長い演説というか自慢話、最後に説教まで飛び出して皆辟易しました。来賓の下山市の市長さんもうんざりという顔をしてました。それに毎年同じ話をするのだから、皆、すっかり覚えていきますよ」

倉沢建機の主管工場である下山工場では、創立記念日の式典に歴代の工場長

に招待状を出し、出席した工場長で古参の者が、自分の工場長時代のエピソードなどの話をするのが恒例となっている。高齢の人が多く体が不自由で欠席する人も多いし、現役を退いて今更、会社に行くのも気が引けると思っ欠席する人もいる。毎年のことなので一度スピーチをしたら、次回からは遠慮するのが普通である。しかし、太田黒の場合は必ず出席してスピーチもする。

「太田黒さんねえ。しかし、招待状を出さないわけにはいかないだろう。ちょっと前に俺のところに『まだ招待状を出してないのか』と訊いてきたよ」

「今年もきつと最古参だろうから、スピーチをすることになるでしょうね」

「彼よりも古参の草壁さんはまだ存命というから、お願いして来てもらおうか」

「それも考えて、草壁さんの息子さんにそれとなく訊いてみたんですが、草壁さんは夫婦で老人ホームに入っており、とても出席できるような状態ではない、と言われました」

「スピーチなし、にするか」

「慣例ですから、急にやめにするのもなかなか……」

「そうか、泣く子と地頭には勝てないか」

結局、従来通り、太田黒をはじめ、歴代工場長に招待状を送ることになった。太田黒はその日を楽しみにしていた。当日、太田黒は来賓たちに「倉沢建機株式会社 元・常務取締役」という肩書のある名刺を得意になって配っていた。種々の来賓の挨拶のあとに紹介されて太田黒が壇上に上がった。会場を埋めた社員たちを見渡して、現役に戻ったような高揚した気分になった。やおら口を開いた。

「私は昭和〇〇年から〇〇年まで、工場長を務めていました。当時はバブル期で好景気で浮かっていた時代でした。私は会社の景気のいい時にこそ、儲かった金をどしどし設備投資につき込むべきと、異次元の設備投資をやりました。まず、生産技術部長の横山君をドイツに出張させて、『ライバルメーカーがどんな工作機械を注文しているか調べろ、そして、それ以上のスペックのものをいくら高くても買え』と指示したのです。そのドイツのメーカーは世界トップの工作機械メーカーでした。その機械を導入したことで効率よく、他社と比べて品質のよい建機を製造することが可能となりました。今でも使われているはずですが長には『あんな高いものをどうして買ったのだ』と言われましたが、自分には先見の命があったと思っています。社長にももっと先を見る目があれば、我

が社ももつと発展したでしょう。また、福利厚生にも金をつぎこんで皆に感謝されました……」

太田黒の演説はこの調子で滔々と続き、一通り自慢話が住むと、今度は現役を説教。

「今は残業などを、社員にあまりやらせないようですがそれは間違っています。昔はそんなことをしませんでした。猛烈に仕事をしてこそ、能力が伸びるし、会社も発展するのです。ワークライフ・バランスとか、わけのわからないことを言う経営者がいますが頭がどうかしているのではないかと思います。さつき、工場長が挨拶のなかで『これからの建機はA Iを駆使したものにしていく』というようなことを言っていました。A Iはなんのことか知りませんが、そんなものは建設機械とは関係がないことです。大きな建築機械を高く売れば儲かるのです。……」

だんだん、矛先が変ってきて、今度は、日本社会を攻撃しだした。

「私が工場長を辞めた頃から失われた三十年が始まった。それは猛烈に働くことをしなくなったからだ。世の中、みんな、たるんでいる。もつと元気を出して、もつと働け、と言いたい」

言いたい放題である。長い演説もしゃべり疲れたのかようやく終わった。聴衆は皆、うんざりと言った顔である。

工場長が総務部長を引き留めて言った。

「来年は、太田黒さんが老人ホームに入っていることを祈るよ」

「今日のような話は老人ホームで老人相手にやって欲しいですね」

「これが続くようなら慣例を破って、スピーチはなしにしたいな」

それから、少しして太田黒が高齢者の運転する車にはねられて、足を骨折して、車椅子の生活となりほどなく老人ホームに入居したということが、風のたよりで春田工場長の耳に入ってきた。

「工場長、来年はほっとしますね。太田黒さんも車椅子では、さすがに呼ばれても来ないでしょう」

「わからんぞ、来るかもしれない。来たらスピーチはなしだ」

ここは朝日堂の奥にある和菓子製造の工場である。満太郎が珍しくやってきて桃子に言った。

「手伝えるようなことがあれば、何でも言ってくれよ。体はまだ十分動ける。餡練りなんか、まだまだ、若い奴には負けない。練り方にコツがある」

「ありがとう。餡練りはAI機能のついてる機械でやるので人がやるよりもうまく練れるわ。お父さんに特に頼むような仕事は今のところはないわ」

そっけなく、言われた満太郎はカットなった。

「なんだ、その言い方は。人が手伝ってやろうと言うのに。俺が邪魔なのか。そうなら、そうとはっきり言ってくれ」

桃子は、苛立っている満太郎を持って余した。それ以降、なるべく相手にしないことにした。話かけてくると、わざと携帯電話を耳に当てて、掛かってきたかのように見せかけて、「悪いはね、今、電話が掛かってきて手が離せないの」と言ったりすることが多くなった。何度も同じ話を聞かされていた孝則もだんだんうんざりするようになり、適当にあしらうことが増えてきた。

満太郎はなぜ、皆が自分を避けるようになったのかその理由が分からなかった。もう、自分が必要な人間になったのかと、仲間外れにされていると感じて、この家に居たくないと思うようになり、前の自分の家が懐かしくなった。そこには広々とした公園が近くにあり、自然の残っている川の土手を散歩することも出来たし、ひとりの時間を楽しめた。少し離れたジムも車で出かけて暇潰しが出来ていたし、車の運転も刺激があつて気晴らしになった。今度、下町の商店街に移ってきた。しかし、ここは働く者にとつては便利がいいが老人が出かけるようなところが近くにない。運転免許を返上したことも後悔した。自分が取り残されたようで孤独を感じるようになった。

日が経つうちに、満太郎はだんだん元気がなくなり、元の家に帰りたいたいの思いがだんだん強くなってきた。満太郎の様子を心配した桃子は百合子に相談することにした。実家にやってきた百合子は満太郎のあまりの変わり様にびっくりした。以前は、大きな声で笑っていたが、それもないし覇気がなくなっていた。

「お父さん、変わったわね。元気がなくなつたわ」

「環境が変わったのが影響したのではと思うわ。私たちは下で毎日、忙しく働いてほとんど顔合わせないし、この辺には気晴らしに年寄りが散歩にいけるような場所もないの」

「ジムはどうなの」

「勧めてみたんだけど、一度、行って『自分には合わない、前のところがよかった』と言ってそのまま」

「老人はスーパーや大病院が近くにある街中に住んだほうが安心だっていうけれど、お父さんのように体が達者なうちは、郊外のほうがいいのかもしれないわね」

「そうね。元の家に戻ったら元気になるかもしれないわね。そうなると貴女の家にちよくちよく行くようになって面倒かけるかもしれないけど」

「それくらい我慢するわ。それで元のように元気になってくれれば言うことないわ」

満太郎はわずか三カ月で元の家に戻った。しかし、前のように百合子のうちをちよくちよく尋ねてくることもなくなった。百合子はかえって心配になって食事を作りに行ったり、作ったものを持っていくようにした。ある日のことである。満太郎がポツリと言った。

「俺、老人ホームに行くよ。いつもいつも百合子に食事の用意をしてもらうのは悪いし」

百合子はあまりの変り様に驚いたと同時に『桃子のうちに行く』と言ったときに、なぜ引き留めなかったのか、運転免許もどうして取り上げたのか、と後悔して涙が出てきた。

「食事の用意くらいしてあげるよ。老人ホームなんか行くことなんかないわ。

ここお父さんとお母さんの家でしょ」

と言って「ここにいれば、お母さんと同じようにこのうちで死ぬるのだから」という言葉を飲み込んだ。

しかし、満太郎は寂しそうに言った。

「ありがとう、でも行くことにもう決めたんだ」

満太郎は養護老人ホームに入ることになった。孝則と桃子に連れられて入居した日のことである。廊下を歩いていると、ある部屋の入口の表札が孝則の目に留まった。他の部屋の名前だけのものとは違い、少し大きめのプレートには『倉建機株式会社 元・常務取締役 太田黒辰夫』と書かれてあった。孝則は徳岡から聞いた話を思い出した。